

20	蒲郡	蒲郡市立形原北小学校	ヤマウチ イッペイ	
			山内 一平	
	分科会番号	3	分科会名	社会科教育(小学校)

研究題目

社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業
— 4年「自然災害からくらしを守る」の実践を通して—

研究要項

1 蒲郡市社会科部会の研究題目のとらえ方

「社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」を蒲郡市社会科部会では、以下のように捉えている。

- ①「社会的な見方や考え方」とは、社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類・統合したり、生活に関連づけたりすることと捉える。
- ②「仲間とともに」とは、学びを通してかかわるすべてのものを仲間と位置づけ、社会的事象を主体的に捉え、学びにかかわるすべての「人」「もの」「こと」に対し、様々な立場や考え方を多角的・多面的に取り込みながら、自らの学びを深める。さらに、問題解決に向けてそれらの考えの共有や合意を経て、問題解決に取り組み続けていく姿と捉える。
- ③「よりよい社会づくりへの参画をめざす」とは、自分にとって身近な社会的事象と出会い、産業や文化を継承し、発展する活動にかかわっていかうとする資質や能力を養っていくことと捉える。

2 主題設定の理由

本学級の子どもたちは、新しく始まった委員会活動にも積極的に参加し、仲間とかかわりながら活動することができる。また、都道府県の特徴についての学習では、地図帳を隅々まで調べ、「りんごは寒いところでたくさん育てられている」「愛知県はやっぱり自動車がたくさんある」など、資料をもとに日本の各地域の特徴を捉えることができた。

6月実践「ごみのゆくえ」では、家のごみがどのように処理されているか知っている子は、36人中13人であった。ごみステーションに見学に行ったときには、気づいたことをメモに残した。「どうして黄色い網がかかっているんだろう」「時間が決められているのはどうしてかな」とたくさんの疑問をもった。それらについてクリーンセンターの方に答えてもらった。実際に見学することをきっかけに、子どもたちは意欲的に学習に取り組んだ。しかし、実際に自分でごみすてに行くようになったという子は3人増えたのみで、単元終了後に学んだことを生活にいかす姿は、あまり見られなかった。

そこで、地域で起きた地震である三河地震を取り上げ教材化し、地域が抱えている問題について考える単元を構想した。過去に起きた大きな地震の被害を学ぶことで、身近に危険が潜んでいることを自覚し、命を守ろうと考えることを期待する。また、地震から身を守る手段を考えるなかで、自分たちだけでなく地域の方々の力も必要だと気づき、ともに活動することが大切だと考える力を養いたい。

以上のことから研究主題を「社会的な見方・考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」とし、本研究に取り組むことにした。

〈めざす子ども像〉

- ・身近な社会的事象から表出した学習問題を見つけ、解決に向けて学び続ける子
- ・身近な人とかかわりながら、学習したことを生活の中でいかそうとする子

3 研究の仮説と手立て

(1) 研究の仮説

- 仮説Ⅰ** 子どもたちが学習問題と出会う場面において、地域で起きた地震について事実や実物に触れながら学べば、地震に対する危機意識をもち、問題解決に向けて学び続けるだろう。
- 仮説Ⅱ** 学習問題を追究する場面において、友達や家族とかかわる場や体験的に学ぶ場を設ければ、命を守っていききたいという思いをもち、学んだ地震対策に取り組む始めるだろう。

手立てⅠ 被災した方のメッセージを聞く場や、形原に残る地割れ跡を見学する場を設ける。

手立てⅡ 友達とかかわる場や、避難所開設を体験する場、地域に学びを伝える場を設定する。

4 単元構想と抽出児童A

学習活動 ○…追究する場面 ●…共有する場面	教師支援
① 出校日に地震が来てびっくりしたよ ・突然揺れが起きてびっくりしたよ ・もっと大きな地震が起きたらどうしよう ②③④⑤ 形原でも、昔、大きな地震があったんだって！ ・実際に形原では233人も死んでしまった ・近所の人と協力して生活していたって ・実際に地震がおきたらどうしたらいいんだろう ⑥⑦ 地震が起きたとき、「命を守る」にはどうしたらいいんだろう？ ⑧⑨(調べ)⑩⑪⑫(実践) 今、地震が起きたらどうなるのかな ・食べ物なくなる ・家族とはなればなれになる ・ほとんど対策できてないな ・地震対策をしなきゃいけないね 地震に備えて、今できることを調べよう(防災) <調べたいな> ・家具を固定する方法を調べよう ・避難のとき何を持ち出すといいの <実際に家でやってみたよ> ・棚を固定して動かなくなったよ ・防災バッグに食料を入れておいた ・家の地震対策はこれでいいのかな みんなはどうしているんだろう 取り組んだ備えを伝えあおう！⑬⑭ <防災バッグを作る> <家の中の安全> <避難場所の確認> ・水がたくさんあると ・棚を固定して ・小学校に避難すると 安心だよ 倒れにくくしたよ 家族でできたよ たいさくをすると、安心がたくさんになるね！ ・家が倒れた時は、外で暮らさないといけないのかな ・避難するだけで大丈夫なのかな 避難所にはなんでもそろっているのかな ぼくたちだけではできないことはどうしたらいいんだろう⑮⑯⑰ <おうちの人に聞いてみよう> <防災課の方の話> ・近所の人と協力する ・テントやベッドなどを準備するし ・避難できる準備をしないとけない 生活しやすい工夫をする ・自分や家族の命を守れたら地域のひととの助け合い(共助・公助)が大切なんだ 「命を守る」ために自分たちができることを考えて伝えよう！⑱⑲⑳㉑ <考えよう> ・家での地震対策をもっとしたいな ・地域の人たちと一緒に地震を乗り越えたいな ・地域の人は地震のことを知っているのかな <伝えよう> ・地震の怖さを伝えたいな ・安全な避難の仕方を伝えたいな ・防災カルタや防災すごろくを作って分かりやすく伝えるぞ	・地震への危機感を高められるよう、能登地震の動画や被災した方のメッセージビデオを見る機会を設ける。さらに、地元の宗徳寺の地割れ跡を見る場を設ける。 ・防災の必要性をより強く感じられるよう、家での地震に対する備えを調べる。 ・防災の大切さについてより深く考えるために、取り組んだ備えについて、話し合う場を設ける。 ・命を守るという目的を意識できるように、「この備えで本当に地震が起きた時に生き残ることができるか」と切り返す。 ・国や市、地域が行っている共助・公助の仕組みを理解するために、危機管理課の方に話をしただく場を設ける。 ・学んだことを実践する意欲につながるよう、地域に発信する場(BOUSA Iキャラバン)を設ける。(総合的な学習との連携)

【抽出児童A】

児童Aは、6月実践「ごみのゆくえ」では、自分の家を出るごみの種類を調べ、家を出たごみがどのように処理されていくのかを学んだ。そして、自分の家を出たごみの量を調べ、「もっとごみを減らしたい」という思いをもつことができた。しかし、夏休み明けにごみを減らすことに取り組むことができたか聞くと、ほとんどできていない様子だった。

本単元に入る前に実施したアンケートでは、「自分の家ではどんな地震対策をしているか、知っていますか」という質問に対して「知らない」と回答しており、地震への危機意識は低いと感じられた。そんな児童Aがこの単元を通して、地震に対する意識を高め、生活にいかしていく姿を期待する。

5 授業実践と考察

①三河地震で被災された方のビデオメッセージと出会う児童A（手立てⅠの検証）

第1時では、夏休みの出校日に地震の緊急放送が入ったことをふり返り、地震についてどう思うかを交流した後、子どもたちの記憶に新しい能登半島地震の被災当時の動画を見た。屋根の瓦が落ちてきたり、電信柱が斜めになったりしている様子を見て、子どもたちは「急に起きたら怖い」「すごく揺れて気持ち悪くなりそう」といった反応を示した。その後、地震について知っていることを話し合ったところ、「このあたりでも大きな地震があったらしいよ」と三河地震のことを知っている児童がいた。そこで、第2時では、どんな地震だったのか、実際に被災された方はどんな思いだったのかを知るために、被災された方のビデオメッセージを見る機会を設けた。ビデオメッセージでは、被災された方が小学校2年生の時、明け方に大きな地震が起きて、家のふすまが倒れたことや、近くに住んでいる人が布団を抱えて助けに来てくれたことなどを教えてもらった。また、家がつぶれて住めないため、近所の人たちとわらぶき屋根の小屋で一緒に寝泊まりをして大変だったことや、これからまた起きるかもしれないから準備をしておいてほしいと言う思いを聞いた。児童Aはふり返りに、「家もかたむいてしょうじのしたじきにもなったし、外でずっと生活してて、道路もふくれたりして、地しんがとってもこわいと感じた」（資料1）と書き、当時の状況を知り、地震の怖さを強く感じていたことがうかがえる。また、これからどのようなことを学んだり、考えたりしたいかという問いには、「大きな地しんが家で起こったら、れいせいにひなでできるようにいろいろ考えていきたい」（資料2）と答え、実際に地震が起きたときにどうするとよいか考えたいという思いをもった。しかし、具体的にどんな地震対策をすべきかについては考えが至っていない様子であった。

2 三河 地しんでひさいされた方のメッセージを聞いて感じたことを書きましょう。

小学2年生のときせんそうもあて、1月13日の3時
ぐらいに地しんか起きて、家かたむいてし
のしたじきにもなったし、外でずっと生活して
道路もふくれたりして、地しんがとってもこわ
いと感じた。

【資料1】 児童Aの感想（第2時）

3 これからどのようなことを学んだり、考えたりしていきたいか書きましょう。

これから大きな地しんが家で起こったら、れ
いせいにひなでできるようにいろいろ考えてい
きたい。ひなの方法を覚えて

【資料2】 児童Aのふり返り（第2時）

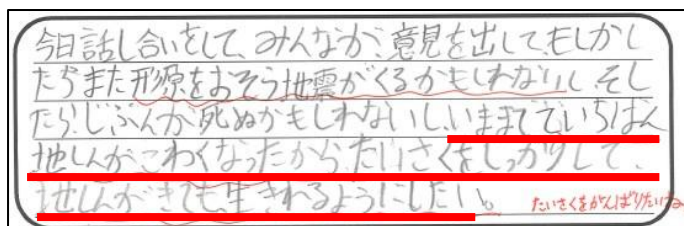
②三河地震の地割れ跡を見学し、三河地震の被害について知る児童A（手立てⅠの検証）

三河地震に関心をもった子どもたち。子どもたちが住む学区にも当時の地震の跡が残っていることを知り、第3～4時で見学に行くことにした。80年前の地割れ跡であるため、枯れ葉や草木に覆われていて分かりにくい部分もあったが、地面が割れていたり、向こう側が盛り上がっていたりすることに子どもたちは驚いていた。また、宗徳寺に置かれている看板を見たり、教師から形原地区の被害状況について聞いたりして、当時の悲惨さを知った。見学を通して児童Aは「（三河地震は）死者は2306人で、のと地震で死者は600人、三河地震で形原は4番目にひがいが大きかった」（資料3）と三河地震の様子や被害について着目した。教師が「被害を知ってどう思った？」と聞くと「たくさんの方が形原でなくなっていて、びっくりした」と答え、被害の大きさに驚いている様子であった。第5時では、宗徳寺の地割れを見たり、被害について聞いたりして考えたことを話し合った。話し合いのなかでは「三河地震は能登地震より被害が大きかった」「形原で233人もなくなっただけじゃない」「夜に突然起きているから実際にきたらこわい」と、地震の被害について考えたことがたくさん出てきた。そこで「こんな地震が今起きたらどう？」と教師が問い返したところ、「対策しているか

地割れがすごく、しかも地割れで木の根に
折れてしまっていた。三河地震はマクニチドリでしんど
は600人、死者は2306人でのと地震で死者は600
人三河地震で形原は4番目にひがいが大きかった。
しんどの人はわいて、死んでしまった。しんの深さは約

【資料3】 児童Aのふり返り（第3、4時）

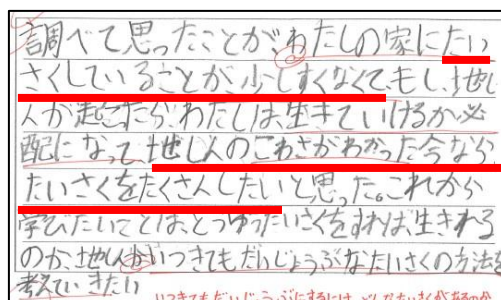
ら大丈夫」「今の対策で本当に大丈夫かな」「家で対策しているかどうか知らないな」とそれぞれの意見が出た。地割れ跡を見学したことが家での地震対策について改めて考えるきっかけになったことがうかがえる。話し合いをふり返った児童Aは「いままでいちばん地しんがこわくなったからたいさくをしっかりと、地しんがきても生きれるようにしたい」（資料4）と、地震の怖さを今までよりも強く感じ、命を守るために対策をしたいという思いをもった。住んでいる地域で起きた三河地震による地割れ跡を見学したことは、地震に対してより高い危機意識をもつことにつながったと考えられる。また、見学後の話し合いのふり返りから、児童Aが問題解決に向けて行動しようと考え始めたことがわかる。



【資料4】 児童Aのふり返り（第5時）

③クラスの仲間の取り組みを聞き、さらに安心したいと考え始める児童A（手立てⅡの検証）

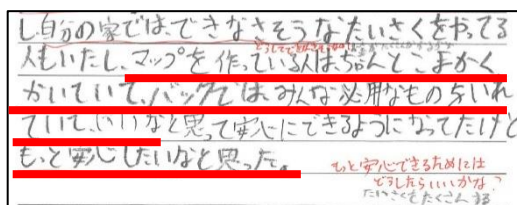
三河地震で被災された方のメッセージや地割れ跡の見学から、地震への危機意識が高まり、「どうしたら命を守ることができるのだろう」という疑問をもった子どもたち。第6～7時では、今地震が起きたら大丈夫なのかを考えるために、家で行っている地震対策を調べた。ふり返りには「たいさくしていることが少し少なくて」「地震のこわさがわかった今ならたいさくをたくさんしたい」（資料5）と書かれており、家での対策はまだまだ不十分であり地震に対してもっと備えたいと考えていることが分かる。



【資料5】 児童Aの家調べのふり返り

第8～9時では、地震に対する安心を高めるために、自分でできる防災について、一人調べを進めた。児童Aは避難時に持ち出す物のリストを調べたり、揺れた時にとるべき行動について調べたりしていた。第10時で調べたことを交流すると、「たくさん調べたけど、実際にやらないと意味がない」という意見が出た。そのため、第11～12時では、どんな防災に取り組むか決めて、そのために必要なことをワークシートに書き出し、家で取り組むことにした。多くの児童の活動のふり返りには「クラスの仲間がどんな取り組みをしているのか知りたい」と書かれていた。

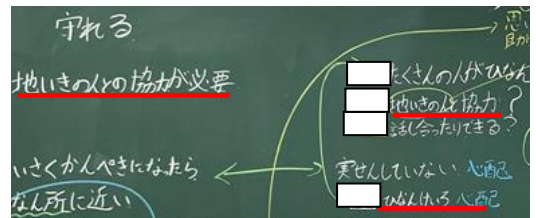
そこで第13時では、子どもたちが家で取り組んできた地震対策を伝え合う場を設けた。子どもたちは自分や家族と協力してできる取り組みをあげ、防災リュックを作成したり、防災マップを作成したりといった取り組みを発表した。「取り組みをしたことで、ちょっと安全になった」「逃げる場所や危ない場所がわかって安心した」と対策をしたことで、安全・安心になってきたと感じる子が増えた。児童Aは自分の考えと見比べたり、それぞれの取り組みのよさについて考えたりしながらみんなの取り組みを聞いていた。ふり返りには「マップを作っている人は、ちゃんとこまかくかいていて、バッグでは、みんな必要なものをいれていいな」「もっと安心したいなと思った」（資料6）と書いた。また、「もっと安心できるためにはどうしたらいいかな？」という教師の朱書きに対して、「たいさくをたくさんする」と、自分や家族を守るために取り組みたい対策をより具体的に考えられるようになった。クラスの友達と取り組みを伝え合ったことで、様々な取り組みがあることに気づいた。また、教師との朱書きでの対話から、有効な対策についてさらに追究しようとする姿が見られた。



【資料6】 児童Aのふり返り（第13時）

第14時では、対策をしたから安全になってきたと思っている子どもたちに、改めて「今地震が起きたら命を守れるかな？」と問いかけた。児童Aは、「守れない」「家族ががれきのしたじきになったりしたらたすげれないし、食料がなくなったら死んでしまう」と考えていた。児童Aは、まだまだ心配の方が大きいこと、

特に避難の途中での困り感について、自分たちで対策したことだけでは不十分であると感じていることが分かる。話し合いでは「避難所に近いからだいじょうぶ」「対策をしたから守れる」と、もう対策は十分にできているという意見があがった。一方で「対策したことは本当に役立つのかな?」「僕たちだけでは難しいから地域の人と協力することも必要」「避難経路が心配」(資料7)と、自分たちが行った対策だけでは足りない、地域の人と協力しないと命を守ることはできないという意見も見られた。話し合いのあと、児童Aと対話をする「助け合いができたらちょっとは命を守れるなって思ったけど、避難するまでにけがをしたときに助けてくれる人がいるのか心配」(資料8)と話した。友達と意見を伝え合う場を設けたことで、がれきにはさまった家族を助けられないと考えていた児童Aが、地域の人と協力することで命を守れるかもしれないと気づくことができた。



【資料7】授業の板書(抜粋)(第14時)

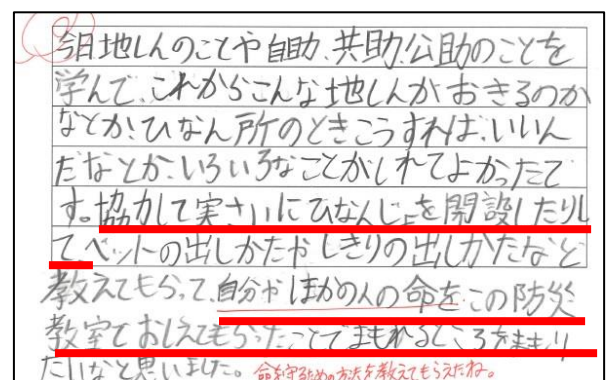
T ワークシートには守れないって書いてあったけど、話し合いで仲間の意見を聞いてどう思った?

A 助け合いができたら、ちょっとは命を守れるなって思ったけど、避難するまでにけがをしたときに助けてくれる人がいるのか心配。

【資料8】対話記録

④テントやベッドの組み立てを経験し、たくさんの人の命を守ろうと考え始める児童A(手立てⅡの検証)

「自分たちだけでは難しい、助け合いが大切」という思いをもった子どもたち。第15時は、地震が起きた時に助け合うための方法について家の人に聞いたり、教科書で調べたりすることにした。調べを進めた子どもたちは、共助・公助という言葉があることを知った。共助・公助について調べるなかで、児童Aは「蒲郡では地震が起きた時どんな取り組みをしているのか知りたい」「みんなは調べられたのかな」と、蒲郡市が行っている公助に関心をもち、友達にも聞いてみたいという思いをもった。そこで、第16時では、子どもたちが調べたことを交流する場を設けた。共助については「公民館で防災教室をしている」「地域の消防団が助けてくれる」という意見が出ており、身近な地域の活動についても調べることができていた。しかし、公助について蒲郡市が行っていることはインターネット等では詳しく調べることができなかった。子どもたちが「もっと知りたい」「詳しい人に聞いてみたい」という思いをもったため、第17時では、蒲郡市役所の危機管理課の方に話を聞くことにした。危機管理課の方の話のなかで、南海トラフ地震で予想される被害は死者500人、7600棟の建物が壊れてしまうという地震の危険性や、蒲郡市ではハザードマップを作成したり、災害が起きた時の放送や避難所の開設準備をしたりと、様々な公助をしているということを学んだ。その後、地震が起きて避難所に来た時のテントとベッドの組み立てを実際に行った。グループに分かれて実際に組み立てた子どもたちは、「テントを立てるのは自分たちでもできるからがんばりたい」「ベッドは力があるから大人にお願いしよう」と、地震が起きた時のことをイメージしながら活動に取り組んだ。児童Aはふり返りに「協力して実際にひなんじょを開設したりして」「自分やほかの人の命をこの防災教室でおしえてもらったことでまもれるところをまもりたい」(資料9)と書き、友達と協力して避難所を開設した経験をいかして、自分や他の人の命を守っていきたいという思いをもったことが分かる。避難所開設やベッドや仕切り活用の実際を見て体験したことが、児童Aの自分や家族の命だけではなく他者の命も守りたいという主体的な姿につながったと考える。

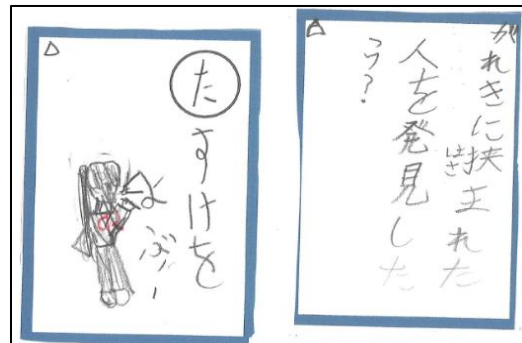


【資料9】児童Aのふり返り(第15時)

⑤地域の方々に地震について知ってほしいという思いを高める児童A(手立てⅡの検証)

地震対策について学び、多くの地震対策に取り組んできた子どもたち。「今まで地震についてしっかりと対策していなかったけれど、たくさん対策ができて安心した」「これから、いつ地震がきても、共助も大切にし

て乗り越えたい」と学習をふり返った。そんな子どもたちに、BOUSAIキャラバンというイベントがあり、防災アイデアを募集しているということを伝えた。すると、子どもたちは今まで学んだことをもとに様々なアイデアを考えだした。中には実際に取り組むのは難しい意見もあったが、「小さい子にも楽しく学べるように」と防災クイズカルタ（資料 10）や防災すごろくを作るというアイデアを出したり、ポスターを作ったりして応募することにした。児童Aは、防災クイズカルタ作りに取り組み「がれきに挟まれた人を発見したら？」「たすけをよぶ」というカルタを作成した。これは、児童Aが今まで追究してきた問題のうちの一つであり、助けを呼ぶ大切さや避難中に起きてしまうかもしれない危険を伝えたいという思いが表れている。そのイベントのなかでステージでの発表があることを子どもたちに伝えると、児童Aを含む 12 人の児童から発表したいという希望があった。地域の方々に学んできたことを伝えたいという思いをもって、練習を重ねてステージ発表に臨んだ。



【資料 10】児童Aの防災カルタ

三河地震の被害の大きさについてお客さんに伝えたり、防災カルタや防災すごろくの紹介をしたりして学んだことを地域の方々に発信することができた（資料 11）。BOUSAIキャラバン後、児童Aは、「たくさんの人に聞いてもらえてよかった。今まで知らなかった、今日学べてよかったと言ってもらえてうれしかった」と言っており、学んできた成果を発表したことでたくさんの人に防災の大切さについて伝えられた喜びを実感できたと考えられる。また、社会参画への一步を踏み出したといえる。



【資料 11】ステージ発表をする児童Aたち

6 研究のまとめ

（１）研究の成果

仮説Ⅰについて

ビデオメッセージで実際に被災された方の話を聞いたことは、児童Aが地震についてもっと知りたい、命を守りたいという思いをもち、学習問題に取り組む意欲を高めたといえる。さらに実際の被害が保存されている宗徳寺で地割れ跡を見学したことは、地震に対する危機感を強く感じるにつながった。したがって、地域で起きた地震について、事実や実物に触れながら学んだことは有効であったといえる。

仮説Ⅱについて

友達とかかわり合う場を設定したことで、様々な意見に触れ自分の意見と比べながら、命を守るための方法を考えることができた。その結果、家での防災対策を具体的に取り組みはじめた。また、避難所を開設する体験を経験したことで自他の生命を守りたいという思いを高めることができた。その結果、BOUSAIキャラバンに参加して地域に発信し社会参画への第一歩を踏み出した。したがって、仲間とかかわる場や体験的に学ぶ場を設けたことは有効であったといえる。

（２）今後の課題

子どもの問題意識を高め、社会参画をめざすためには、子どもの思いや考えの変容に合わせた「人・もの・こと」との出あいの場を仕組むことが重要である。本実践では地割れ跡や避難所開設訓練などを通して出あいの場を仕組み、子どもの問題意識を高めることができた。今後は、様々な「人・もの・こと」とのかかわりを通して表れた子どもの思いのずれを取り上げ、新たな問いを見出し、さらに個人追究を深めるための手立てについて研究を進めていきたい。